



# 出会い 働く 暮る \*十日町\* 雪掘りキャンプ 昨年の参加者感想



## ◆「十日町発レゾナンス」

桐生東部教会 三浦啓

今回も十日町でレゾナンスしてきました。これぞ十日町で過ごす醍醐味です！

これまでの10年間、兵庫教区被災支援長田センターが毎年2月に主催してきた「雪掘りツアー」は昨年の2月に10回目という節目をもって終了しました。その10回開催された雪掘りツアーに私は合計9回参加してきました。今回の参加が自分にとって十日町で過ごす10回目の冬になります。

今回、関東教区が主催する形で新井純先生、長倉望先生が中心となり、「十日町雪掘りキャンプ」が開催されました。これまでの雪掘りをする、教会前に雪像をつくる、夜に中越地震や阪神淡路大震災、東日本大震災の話を書くという内容は変わらずに今回の「雪掘りキャンプ」に引き継がれました。私も2日目の夜にお時間をいただき、手束信吾先生、柴田信也先生の後に少しだけこれまでずっと十日町の雪掘りに参加してきた中で学んだことや気付いたこと、感じたことなどをお話させてもらいました。お話する機会をいただき、何を話そうかと考える中で、自分の中で第1回目の「雪かきツアー」（第1回目は“雪かき”という名前でしたが、十日町の豪雪を経験し、私たちがイメージする“雪かき”と、現地の方たちが“雪掘り”と呼ぶそのギャップを前に、2回目以降は“雪掘りツアー”に名前が変更されました）に参加した時の事、これまで参加してきたそれぞれの雪掘りツアーを思い返してみました。

私はこの雪掘りツアーや被災地へのボランティアに参加する中でわからなかったことがありました。それは、どうして自分は毎年雪掘りツアーに参加したり、被災地へボランティアをしに行くことを続けてきたのかということです。教会などではボランティアへ行く時に「気を付けて行ってきてね」、「お祈りしています」など声をかけられることが多いのですが、学生時代に教会とは違う仲間や知り合いから「どうしてお金や労力がかかるのにボランティアへ行くかの？」という質問をされることがよくありました。でも、自分の中でその質問に上手に答えられる言葉を持ち合わせていませんでした。でも、ある時、その答えを見つけました。それは東日本大震災が起きた後、被災地へ駆けつける度に被災地で必ず仲間と再会したことでその答えがわかったのです。「十日町雪掘りツアー」のかつての参加者たちが自主的に被災地へ駆けつけ、大きな働きを担っている姿も見ました。彼らが「被災地へ行かなければ」と動いたその背景には間違いなく被災地である十日町で雪掘りをした経験、雪掘りを通して出会った人々との交わり、また十日町で聞いた被災当時の話などがあつたのだらうと思います。私もその1人です。被災地で「十日町雪掘りツアー」の仲間に出会う度に、「なぜ私は被災地へ駆け付けるのか」という問いに対し、被災地で出会った仲間、経験した事、学んだ事が自己中心的でどうしようもない私を少しずつ変えてくれたのだ。だから被災地のこと、被災された方々を第三者としてではなく、自分の大切な隣人として見られるようになったから被災地へ行き、何かさせてもらいたいと思うようになったのだということがわかったのです。この雪掘りキャンプ中、雪掘りで体を動かしますが、それ以上に心と頭を動かします。よく感じ、よく考えることが多いのです。雪に

向き合うという大変な経験とこれまでに被災された話、被災地で生きてきた話にたくさん心も頭も揺さぶられます。それを皆で共有する十日町での数日はここでしか経験できないものです。私はこれを自分の中で「十日町発レゾナンス」と呼んでいます。

私の好きな言葉に「レゾナンス」という言葉があります。これは“反響する”、“共鳴する”という意味の言葉です。十日町での雪掘りは、自分一人では何もできません。私たちを受け入れてくださる新井純先生をはじめ、十日町教会の皆さん、新井先生のご家族、食事を差し入れてくださる新潟地区の教会の皆さん、これまでのツアーや今回のキャンプを主催して下さった柴田信也先生、長倉望先生、そして雪掘りに参加してくれるひとりひとりがいなければこの「雪掘りキャンプ」は成り立たないのです。いろいろな場所から参加者が集い、初めは知らない人同士の集まりですが、そのひとりひとりが好き勝手に過ごすのではなく、一緒に力を合わせ、想いを合わせながら過ごす光景は私の目にはひとりひとりがレゾナンス（共鳴）して、ひとつのもの（雪掘りキャンプ）をつくりあげているように見えます。そして、十日町でレゾナンスしたものがその場で終わるのではなく、別の場所でレゾナンス（反響）して次の動きや活動（ボランティアなど）に繋がっていくのです。

今回、関東教区が主催する最初の「十日町雪掘りキャンプ」が行われましたが、新潟地区だけではなく、埼玉地区、群馬地区、茨城地区、SCFからの参加者がありました。その参加者といろいろな話をする中で、各地区での青年の活動の様子なども聞くことができました。私は今、群馬地区で休止中だった青年活動を動かそうとしています。来年の雪掘りキャンプには、群馬地区の青年たちを連れて参加したいと思いました。また、ここでの出会いを活かして、雪掘りだけではなく夏の行事など新しい動きに繋がっていけばと思います。そのような形で十日町発レゾナンスが増えていけば面白いなと思います。

## ◆雪掘りキャンプを終えて…

久喜復活伝道所 酒井空

今回、初めて、雪掘りキャンプに参加しました。新潟という地方も、私にとっては、初めての場所でした。

十日町に着いて、最初に思ったのは、あたり一面、真っ白で、映像なんじゃないかと思ってしまうくらい、自分の想像をはるかに超えていたということ。実際に町を歩いても、自分が十日町にいるという実感が湧くのに、少し時間が必要だったくらいです。

今回の雪掘りキャンプは、雪掘りのボランティアをすることと、震災の話を聞くことがメインでした。

私は、1日目は、教会の近くの道路の雪掘りで、2日目は、十日町教会の信徒さんの家での雪掘りでした。私にとって、特に衝撃を与えてもらったのが、2日目の信徒さんの家での雪掘りでした。実際に住んでいるところでは、雪というものが、危険なものになっていて、ものすごく、危機感を感じました。自分がやりたいと思っていた、ボランティアに対する考えの甘さと、現実の厳しさを知りました。

私は、1、2日しか、雪掘りをやらない。でも、ここに住んでいる人たちは、毎年、この時期に、毎日やらなければならない。終わりが見えない、雪掘りを続けることは、なにか、虚しさと寂しさに似た、言葉に表せない感情になっていくな...と思いました。それは、体験しないとわからないと思います。私自身も、雪掘りをする前に色々思い巡らしましたが、全て、無意味だったからです。

少しでも多くの人が、このことを体験できたら、きっと、多くの人の考え方が変わると思います。また、新しい自分を発見することもできると思います。このキャンプに導いてくださった神様と、たくさんの方々の方々の支えと、出会いに感謝です。